一　般　演　題

1. CIS Gastrin Radioimmunoassay Kit による血中ガストリンの測定

末富　一臣　藤田　良樹　中田　太志
福山　　勝　沖田　　功　山田　典将
桜井　　孝
（山口大　放）

最近我々は，CIS より供給された Gastrin Radioimmunoassay Kit を購入し，若干の基礎的検討をおこない再現性の良い結果を得たので，この Kit を用いて各種胃疾患の空腹時及び食餌負荷による血中ガストリンの測定をおこなつた。又胃切除術施行例でのガストリンの変動も検討したので併せて報告する。

2. Gastrin の Radioimmunoassay

○立石　道也　長谷川　真　吉岡　溥夫
岩崎　一郎
（岡山大　2 内）

CIS ガストリン Radioimmunoassay Kit を使用し各種疾患における一日の血中ガストリン動態をみた。早朝空腹時のガストリン値は正常群は最高 62 pg/ml から数 pg/ml 平均 32 pg/ml であつた。潰瘍群では多発性潰瘍に高い値があつた。又低酸症例でも高い値であつた。腎疾腎は一般に低く肝疾患は高い例もあつた。その他皮膚筋炎での高値が注目される。一日のガストリンの変動をみると食後に高くなる群，あまり変動を示さない群に分けられ，前者は十二指腸潰瘍，糖尿病，胃潰瘍に多く，中には2倍以上の変動幅を示すものがあつた。これに対し腎疾患，低酸症などでは食事に対するレスポンスがないかあつてもわずかであつた。この変動が潰瘍に特徴的なものであるか否かはもつと例を重ねていかなくてはならない。日常的な食事という刺激がガストリンを介して胃液分泌に関与しひいては潰瘍の成因となるかという方針で日内変動をみた。

3. ACTH の Radioimmunoassy の試み

○小林　勝昌　末次　信昌　堀野　正治
（山口大　3 内）

成熟モルモットをブタ・ACTH で免疫し，ACTH の radioimmunoassay を試みた。主として，orgon 社の highly purified ACTH あるいは ACTH・Z と CM cellulose を添加し，Difco Freund complete adjuvant を等量加え，よく混和後4週間毎に，multiple に皮下注射し，13回の免疫後抗血清を得た。標識抗原は，chloramine T 法によつてヨード化し，Quso G-32 を用いて ^{125}I-ACTH の精製を行つた。比放射能は，150～250 μCi/μg のものが得られた。Incubation buffer は，0.02 M veronal buffer pH 7.8，1.0 ml(0.25 % HSA，0.5% mercaptoethanol，Trasylol® 500 KIU/ml を含む)，希釈抗血清 0.1 ml，^{125}I-ACTH 0.1 ml, hormone free 血清あるいは未知試料 0.3 ml を用い，4°C で行い，B/F 分離は dextran coated charcoal 法によつた。最小感度は，25 pg/tube で正常人の血中 ACTH 濃度測定には，抽出操作の必要性があり，目下検討中である。

4. Oxytocin の Radioimmunoassy

○加藤　　紘　木戸　雄一　伊藤　武久
鳥越　　正
（山口大　婦）

Oxytocin の Radioimmunoassay を行い次の成績を得たので報告する。

(1) 標識 Oxytocin は Greenwood らの方法に従つて，合成 Oxytocin を ^{125}I で標識して作製

Presented by Medical*Online